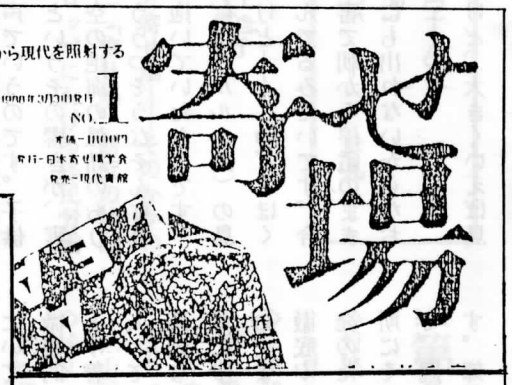
寄せ場学会通信

No 15
1991年10月6日

連絡先
167 東京都杉並区善福寺2-6-1
東京女子大学松沢研究室気付
電話 03-395-1211

シンポジウムの秋

11／23広島開催、決定!!



年報の秋

『寄せ場5』11月発行!!

いなか町のゆううつ

中山幸雄

ゆううつのうつはどんな字、いくらか下書きしてもうまく書けないでゆううつだ。ゆううつといえば——かつて、ラジオだけが唯一のマスメディアだったころ、NHKで「天気概況の時間です」があって、「うつりょう島では北東の風、風力三、天気くもり」などとNHK声でいうのです。子供心に、うつりょう島というその響きが、実に寒々としたくもり空の絶海の孤島のありさまを想起させ、ゆううつそうなそんな島に一種のあこがれを抱いていたものです。うつりょう島（正確にはウルルン島）の島民には申しわけないけど——このごろぼくはうつりょう島に住んでるみたいです。今日は台風十九号の塩害で朝から停電のままで、かつ秋雨で仕事にも出れないからなおさらです。

広島は島ではないけど、大きくいえば島だけど、一方が島ばかりの海、三方を山に囲まれ、ちょび（わが家のいじけねこ）の額ほどの平地から頭にまで無惨に団地が建て混んで、五千万円ほどの建て売りローンで、九〇%が中流の中、植木屋だけが下流の中という、なんともたいくつな、しかし、全国どこにでもありそうなそんな町にいて、ゆううつです。全風景から目をそむけて微視的にはきれいで整った街だと評判で、土建屋とゆ着し続けた歴代の市長は都市整備だけは熱が入っていて、歩道も公園も土のあるところすべて高価なタイルと韓国産の板石で覆いつくし、どんなに歩いても靴に砂がつかないから、座敷からそのままタバコを買いに出ても母さんに怒られない徹底ぶりだ。さらにその上、十余年前に都市再開発のために何かイベントを誘致しようと商工会議所にそそのかされて、九四年にはアジア競技大会で、掘ったり削ったり再々度の整備事業の只中です。郊外の山を崩して建設中のメイン会場と、そこと中心部をつなぐ新交通システム（モノレール）の大工事は、周知の大事故を引き起こし、一般市民がまきぞえになったので、労災死した長崎からの出稼ぎ労働者たちも恨まれるのです。ゆううつな町はいっそうゆううつになっていく。

別に自然破壊に反対する観点で、「となりのトトロ」的なつかしい風景をとりもどそうとは思わないけど、風景の変容とともに失われていく大切な何かがある。というよりも、人間の大切なものを奪うために、風景をどんどん変えていくといった方が適切だろう。都市再開発の過程で、そして、整備が終了した町で、何が起き、何が結果するか。

建設・土木労働者＝日雇い労働者は、広島に大量に流入しており、現認できるけど、小型「寄せ場」をほとんど経由しないので、流入経路や雇用形態の実相ははっきりしない。少しだけ寄せ場人口が増えた程度である。おそらく広島、島根等の山間農村部で直接雇用される現場直行組と、高架工事など特殊大型プロジェクト専門に渡り歩く職人層が多数いて、両者の混成集団が現場労働を支えているのだろう。今後、工期が近づくにつれて、先日の大事故で予測されるように、労働強化とそれにともなう労働災害が多発するに違いない。そして、労災や賃金未払いなどさまざまな理由で、労働現場を追われ、そのまま広島に滞留していく日雇い労働者がいまから、アジア大会終了後、かなり出現することになるのではなかろう

call from HIROSHIMA

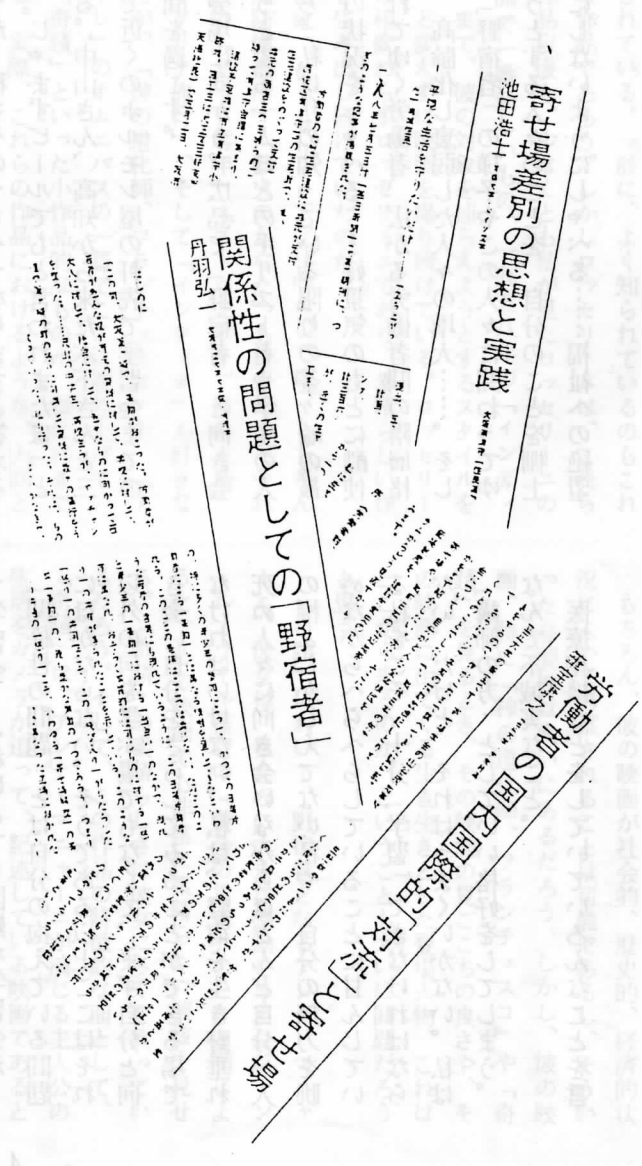
か。

彼らの造った整備され美しい町は、実に冷酷である。疎外とか差別とか、それでも多少は人間味ある概念のなかではなく、市民社会における最低の同質性も前提としない棄民として、排除すべき異物として野宿を余儀なくされるのである。残存していた町共同体意識はすっかり解体し、中流の中に生活スタイルがいっそう均一化された市民社会になじまない者たちに思いやりとかやさしさとか、そんな懐かしいことばはないのです。加えて、行政権力の肥大化と権威化（都庁のライトアップ）は、猿真似的に地方自治体にまで波及していて、管理し得ぬ者、あるいは管理するに値しない者たちに対する役所の迫害と排除は、抜け道のない狭い地方の町にあってはとくに隅々にまで行き届くのです。

こんなにゆううつな町で、十一月二十三日に寄せ場学会のシンポジウムが開かれることが決定して以来、広島、あるいは広島のような地方の町に少しでも利益が還元できるようなシンポジウムのテーマはないものか、という思いから数回の学習会を設定したわけです。まず、六月に「寄せ場4」掲載の筆宝康之さんの講演録「労働者の国内国際的『対流』と寄せ場」の読み合わせ討論を有志でやり、七月には大阪から丹羽弘一さんに来ていただいて、同誌の「関係性の問題としての『野宿者』」を改めてお話ししてもらった。八月は、お忙しい池田浩士さんにお立寄りいただいて、「寄せ場2」の南津守の労働者下宿（人夫出し飯場）建設予定にともなう地元住民の日雇い労働者に対する差別意識のレポートをテキストに、「市民社会と排外」をテーマに討論した。九月には山谷の仲間から駅手配の実態を話してもらう予定だったが、来たものの広島から駅手配で仕事に行ってしまって行方不知で実現していない。

学習会の参加者のほとんどが映画『山谷』の上映運動、あるいは、広島で野宿労働者に関わる活動をしている友人たちです。従って、日雇い労働者に関する一般的認識はあるものの、大都市の「寄せ場労働者」と違って、現場の日雇い労働者――「寄せ場」――野宿労働者の関連が現実のなかで見えない地方の町にあって、特殊な異物と見做されている野宿労働者から普遍的な課題を抽出していくのはとても困難な作業といえます。三回の学習会（今後も続けたい）が、そうした作業を進めていく上で助力になったと確信しますし、広島だけでなく、西日本の各地の町で同じような困難に直面しているだろう仲間たちとも共有できる学習会の延長として、十一月二十三日のシンポジウムのテーマが設定できたらと考えています。

（なかやま・ゆきお／造園工、日雇全協）



広島の一夜を思い出しながら

丹羽弘一

はじめての人たちに会いに行くので、できるだけはなやかに装って西広島の駅前で待っていた。中山さんがこちらに歩いて来る。どうやら私には気づかない。目を合わせるとびっくりしたような顔をする……いや、派手な格好してるもんで……。太田川放水路にかかる大きな橋をわたりながら話をする。……広島って遠いですね、五時間もかかりました……新幹線に乗らなかったのですか……いえ……交通費は出しますのに……。いや、各駅停車が好きですからと言いながら、私はほっとしている。酒は飲めますかと聞かれる。私は酒を飲まんと人間じゃないんですよと、中山さんたちは朝から飲んでいたそうだ。私もそのうちそうなりますと答えると、じゃまずビールでもと言われまたほっとする。中山さん、高知から来た木下さんと三人で近くのホルモン屋の軒先で学習会までの時間を過ごす。

会場に向かう。広島で「野宿者」と向き会おうとする十人ほどのキリスト者や学生の人たち。私は私の知っている限りの釜ヶ崎の最近の状況をしゃべる……好景気のもとに酷使されてゆく労働者、広がる労働者間の階層格差、高齢化し衰弱した人々の増大……。そして「野宿者」の様子やこの人々に関わってゆこうとする人々のことを、自分のことを棚上げにしないようにしゃべる……福祉への絶望と切捨て、さらに見えなくなる「野宿者」を追う排除意識、そして会いにゆく私たちに、衰弱しきった身体で「ほっといてくれ」と答える人々……。現実に対する無力を自覚する中で、関わってゆこうとする人々は認識の転換を迫られる。何かを与えるほど私たちは豊かだったろうか？　自信を無くして初めて、与えられる「野宿者」の豊かさに気づく……。私の話を皆静かに聞いている。これでいいのかなと思う。質問のときに「講師の方」と呼ばれ、それは違うと否定する。

「関係性の問題としての「野宿者」」という学習会、これはとても困難な学習会だ。「関係性の問題」とは自分の抱えている問題にほかならない。そうである以上ここはそれ以外の何を学ぶ場でもなくて、まず自分と向き会い自分をさらしてみることができる場でなければいけない。私は、野宿を生き野垂れ死ぬ人々に向き会いながらほとんど自分一人の掻としかしえてない私や、自分の無力を眺めながらへらへらしていることに甘んじている私をこそ、十分「学習」できなければならない。だけど、それはうまくいかない。私は「講師の方」としていい格好をしてしまう。なんて不誠実なこと。

医療相談などをしていていろんなことを言

return from HIROSHIMA

うひとがいる。……おまえらインチキだろう、俺は知っているんだ……遠くから私を指さして叫ぶひと。机の前に寝転がって……良いことしているってのがみえみえなんだよ、おれらからあんたはこんなふうに見えるんだよ……。初めて言われたときは素直に悲しかった。でもこのように投げかけられる言葉こそ、自分を鍛えてくれていることにすぐ気づいた。そしてこれをも自分の糧にしてしまうようになった。……私たちはとても無力です……神妙に人前でしゃべる自分、「研究者など最低」と饒舌に語る自分。こんな自分のずるさに最近気づいた。……そんな自己認識はあなたの「逃げ口上」に過ぎない、きれい事でも「世のため人のため」にやろうとがんばっている方がまだ前向きだ、そんなことなら金魚の産地の分布でも研究すれば？……。「釜ヶ崎が嫌い」な、日雇労働者である彼女にこう言われた。夕方に疲れて帰って来る彼女、食事もろくに共にせず、会議だのなんだの言って釜ヶ崎に「関わり」に出かける私。……「釜ヶ崎」はどうせあなたにとってはひと事でしょう……、彼女の言葉は素直だ。反論できるほどの内容も持たない私。それがとても痛く、なさけなく、せつない。私にとって「関係性の問題」は今ここにある。

「学習会」を終え、皆でまた先ほどのホルモン屋へ出かけた。よく煮込んだホルモン、生肝、軒先に机を並べて風に吹かれながら飲んだビールがおいしかった。先ほどとはうって変わって皆おしゃべりになる。ミスコンに出て大演説をした話、マニラのスラムの話、また中山さんの仕事の話、楽しくて、また大いに学習もする。広い道のまん中を歩いて飲み歩く。最後に私は疲れて眠ってしまう。中山さんの家まで肩をかしていただいて、ふとんをかけてもらう。皆さんどうもありがとうございました。

水俣病の関西訴訟に関する最近の集会で、花咲皇平さんが「支援」の原点は「気にかかる」ということだと述べておられた。理念よりも「気にかかる」という感情からこそ、素直なあり方が生まれて来るのだと。金魚の産地はあまり気にかからないけど、釜ヶ崎のことはずっと気にかかってきた。これからもたぶんそうだと思う。

（にわ・こういち／大阪市立大学院生）

日本寄せ場学会 秋季シンポジウム

開催日／１９９１年１１月２３日

開催地／広島市

報告・討論内容／地方都市における日雇い労働・建築土木労働の現在と、「開発」のなかでの都市の変容に関して

※時間・会場、および正式タイトル等については、近日中にお知らせします。

ふるってご参加ください！

AUTUMN-ACT/EAST

山谷館現況報告

山谷労働者福祉会館を拠点とした活動は、そもそもの出発点における情勢・状況とその後の建築過程に、大きく規定されている。つまり、山谷の運動のある意味で中心であった山岡強一が右翼暴力団・ヤクザに殺され、直ちに反発としての暴動が起こった。が、その後、継続的恒常的な労働者運動として発展していかず、暴力団側も山谷での動きを水面下に（印紙売りのみに。そばの吉原での管理売春などは相変わらずだが）絞っていき、一種膠着的状態に推移していった。おそらく公安警察主導だったであろう、そういった経過の中で、労働者のための労働者自身による運動の展開は、無念ながら押しとどめられざるを得なかった。

そういった時期において、山谷の労働者と労働運動の真只中から、というのではない形で、あるいは（その他の一部分からは）局面展開のひとつの策として、山谷労働者福祉会館の創立が提起され、やがて現実化し、実際に造られていったというのは、大筋からすれば否定しようもない歴史的事実であろう。

山谷労働者福祉会館は、こういった歴史的事情と背景を否応なく背負わされている。それは今なお、いわば"出生の秘密"を刻印されつづけ、それに呪縛されているのだ。

＊　＊　＊

――思わず前口上が長くなった。山谷労働者福祉会館のその後などをザッハリッヒに報告していこう。

＊　＊　＊

山谷労働者福祉会館活動の基軸をなしているのは、何といってもまず、一階に属する部分であろう。ひとつは食堂である。朝は五時三十分～九時、晩は十七時～二十時の間、日曜祝日以外は休みなしという体制で、一日百～二百食程度を出し続けて、この十月でちょうど一年になる。その名も「やま食堂」というモノスゴイ（端的な）名が付いているが、とにもかくにも労働者から一定よい評判をとっているようだ。なにしろいい材料を使っているし、定食が二百五十～三百円などと安いから。専従が二名いるが、とにかく洗い場とかお膳の出し入れをするホールの人とか、働き手では始終苦労しているという。若くて元気のいい人は志願してみませんか。山谷の、労働者の雰囲気（の一断面）がよく分ると思う。

高齢者や心身に障害のある労働者も多い現状なので、最近、農薬を使わない、あるいは低農薬の材料や調味料――味噌とか醤油、塩、油、砂糖、みりんなどを使おうとする動きが出てきている。ただ単に食を売る、というのではなくて、食べる側の健康全体のことを考えていこうということである。越年期に炊出しをやるようになってもう十有余年たつが、食事と健康を結びつけて考えようとする動きこそあったものの、具体的な動きとして結実したことはなかった。現役バリバリの労働者は、そしてそこに思想的に依拠した争議団などの運動は、これまで炊事のこと、まして健康と食事との有機的結び付きをひどく軽視してきたのである。新しい動きの芽、といえよう。

新しい芽といえば、会館の活動全体の中で、目や肝臓など身体の悪い労働者や年齢のいった部分、ときにはヤンカラ（酒――）などの参加が目立つこの頃である。評価はいろいろかもしれないが、取り敢えずその芽の育っていくことを期待して、記しておく。

＊　＊　＊

もうひとつは医療である。越冬闘争期の医療班活動の通年化のため、玉姫公園側の山谷伝導所の一室を借りて「伝活・医療相談室」を発足させたのが一九八八年二月。その後「山谷の医療を考える会」がつくられ、会館落成と同時に一階の入ってすぐそばの一室を占めて、「医療にまつわる相談室」が開設された。毎週土・日の十三時から十九時まで、相談が行われている。有志の会などが中心になって、毎週土曜の夜六時から人パトも、やられている。結構数多い労働者の出入りするのが、ここの特徴であろう。月に一度、何百キロも先から自前の車で駆けつ

け、医療相談と二階ホールでの針灸をデモってくれる、Sさんという針灸師も出てきている。詳しいことは、九〇年三月創刊され現在四号まで出ている「山谷と「医療」」を読んでほしい（連絡先は、台東区日本堤一－二五－一　山谷労働者福祉会館医療室☎〇三－三八七六－一六四一または〇三－三八七六－七〇七三＝事務室）。

なお、医療は正式には山谷労働者福祉会館医療委員会という名で、食堂は同じく食堂委員会で、いずれも山谷労働者福祉会館全体の活動の一環であって、その意味で山谷労働者福祉会館運営委員会の下にあるという形をとっている（現実には、この二つそのものが会館の活動であるかのようになっているので問題である）。

＊　　＊　　＊

この他二階には、労働相談室があって、労働災害、賃金不払い、日雇労働者手帳関係等々の話が、わりと切れ目なく持ちこまれている。ここは医療の次くらい多い労働者の参加をみている。

二階のホールは、毎月一度の映画会という決まり切ったものだけではなくて、より積極的に、より多くの寄せ場の、そして各地各分野職業の労働者と出会ってゆきたいと願っている。催し物のないときは、ふだん山谷や隅田川辺で青カンしている労働者が、圧倒的に多く眠っているか、寝ころんで休息している。

＊　　＊　　＊

こうして見てみると、山谷労働者福祉会館を拠点とする活動は、いちおう非常に順調にいっているかのようであろう。だが、そこで行われている諸活動への労働者の参加は、数や層的に限定されているという否定的現状がある。二万を越える山谷労働者大衆、そこと密接な全国の十～二十万の下層労働者、あるいは周辺の外国人労働者へとつながれていく回路は、いまだ不通であるといわざるを得ないであろう。そうしたなかで、これまで十数年を越える山谷釜ヶ崎などにおける労働運動を中心とした諸活動について、財産目録つくりが始められようとしている。まだ文献史料の整理が開始されたばかりであるが、いずれその内容の検討に入っていくはずである。この作業の位置づけも参加者によって必ずしも同じではないが、運営委員会としては山谷労働者福祉会館の今後の活動展開の基礎となるようなものが発見され、共通のものになっていけることが望ましい。日本寄せ場学会としても、そういう方向で協力できたら、と考えている。

なお、東日本支部例会とか三階の部屋での会議・事務執行、コピー機を活用しての史料の複写展示、年報『寄せ場』編集委開催等々、会館を根城にした本会固有の動きについては今回はずし、会館全体につきごく簡単に概観してみた。それらについては、いずれ何等かの機会に報告したい。（TM）

日本寄せ場学会
1991年度会計中間報告

（9月1日現在）

＜収入＞

会費	502,000円
年報売上	163,400
総会参加費（資料費）	70,000
広告料	62,680
合　計	798,080円

＜支出＞

前年度赤字補填分	190,570円
年報製作費	500,000
総会開催費	177,848
山谷会館献金（91/4～91/8部屋使用）	250,000
送料（年報発送など）	35,250
合　計	1,153,668円

※35万円強の赤字。

AUTUMN-ACT/WEST

秋をむかえるまえに

――夏祭りの寓話として――

下平尾直

日頃はキツく絞り切った古雑巾のような釜ケ崎の町にも、ハレの日はやってくる。恒例の夏祭りは、今年も八月十二日を前夜祭として、十三日～十五日までの計四日間に亙って催された。否、実際にはまだ始まっていない。前夜祭の開会式まで、二三時間残っている釜ケ崎の町を散策しているのだ。

一般に「炊き出し公園」と呼ばれる萩之茶屋中公園の西に大きく立てられた看板などが、「第二十回釜ケ崎夏祭り」と太く知らせてあるのを除けば、決してハレでも何でもなく、平生の釜ケ崎同然に釜ケ崎でしかない如く見えるのは、やはり私が釜ケ崎生活者ではないからだろうか。ホルモン焼き屋は当たり前の顔でホルモンを焼き、独り言を言い言い歩くものは独り言を歩き、酔眼で車座になったグループは何年も前からそこに座っているような顔をして、これも不断と変わりない。雑然とした群衆（モブ）、町それ自体が生き物かの如く蠢動し、横光利一の特急列車が駅を石コロ同然に黙殺するように、祭りをも素知らぬ顔で通過してしまうような逞しさと落ち着きなさ――要するに何も変わっていないのだろうか？　それとも心中、祭りを楽しみでソワソワしていたのだろうか？

それを確認するには二つの道筋がある。一つはそのまま銀座通りを南進し、夏祭り会場である三角公園へ向かうことだ。そこでは中央に大きく組み立てられた、赤い旗を持つ櫓が、それ以上に活気だった夏祭り実行委員の「絶対成功させてやる」勢いの声が、更にそれを取り巻く労働者や私服警官たちが見え聞こえしてくるだろう。そしてもう一方の道路は、萩之茶屋二丁目にある「旅路の里」に繋がっている。そこでは今年もパネル展示として夏祭りに参加しようとしたが、まだ殆ど何もでき上がらないまま膝を付きあわせた日本寄せ場学会の何人かが、数少ない資料を前に考えあっていたのである。その姿は、例年通りの西日本支部を彷彿させるものだったろう。

当初のテーマは、昨年の暴動を一つの契機としてとらえた「暴動」観を提示しようという試みで、九〇年暴動がいかに世界へ報道されたかを各国の活字メディアから探って見る／その暴動に参加した人たちの「その後」はどうか／世界各地で過去にどのような「暴動」が起きているか／釜ケ崎暴動史、といった様々な案が提出されていたにも拘らず、殆どNさん一人の尽力（全く！）で唯一、「世界各地の『暴動』地図」が作られようとしていた。「ようとしていた」のは結局その日は制作せずに終わったからである。私は自分のノルマと称して、Nさんが独力で集めて来た新聞記事を数枚持って帰って、家で書き上げたのを、翌朝「旅路の里」の二階にある釜ケ崎資料センターに届けただけ、それだけである。殆ど何も手伝えなかったまま、最終日十五日に三角公園にやってくると、しかしなかなか立派にそのパネルは出来上がっていたものだ。模造紙の中央に描かれた世界地図の周りに、各国での暴動記事を要約したもの

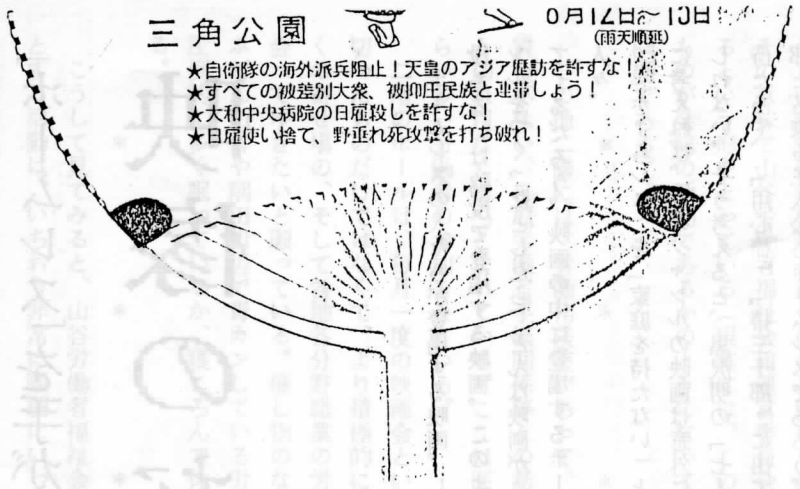
を張り付けたそのパネルは、多くの労働者の耳目を引き付けていたが、余りの急造作業を思うと、ふと申し訳なかった。

私が着いた時には既に相撲大会が始まっていて、四方黒山の人だかりが興奮していたが、公園の片隅にあるテレビ塔の下にも、上を向いて熱中する労働者が少なからずいたのは昨年同様で、「通天閣の歌姫」――なんて素敵な――と異名をとる演歌歌手の、大して上手くもない歌を聞きながら「何が善やら悪び（欠伸）やら」と口走ったのは近松の言葉だったが、いくら寄せ場と文化の関係を考えていたとはいえ、それは私個人の悪意だったのだろうか。しかしその演歌歌手もあのステージで歌うのは、さぞ気合いが必要だったろうと思われるのである。何故なら、話は前後するが、私もまた前夜祭のときに（全く僭越ながら）寄せ場学会を代表してスピーチみたいなことをする羽目になって、その僅か数分足らずで、及び腰のしどろもどろとなり、正に清水の舞台以上の緊張感を背中に感じていたからである。こればかりはやってみないと解らないものだ。「歌姫」がいくら場数を踏んでいるからといって、不断以上に緊張してなかったことはない筈だ。

ただ、やはり問題は寄せ場の文化ということに関わってくるだろう。労働中や人間の日常生活の、歩行や身振りが文化だ、と書いたのはバラージュだった。そしてそのことは寄せ場学会と現場の問題――夏祭りならパネルという参加方法とその参加の仕方の問題も含めて――何度も俎上に登った論議ではあるだろうが――を蒸し返さずにはいられないのである。実際こういうこともあったのだ。前夜祭に参加するため私と同じく西日本支部のT君は、献呈用の一升瓶二本をぶら下げながら「旅路の里」から三角公園へ向かった。途中、リーズナブルに空腹を満たすため中公園前の屋台で一枚百円のお好み焼きを買うために並んだのだが、こともあろうにT君は、同じく並んでいた労働者から、私服警官と間違われたのだ！

確かに彼は昨年の相撲大会で横綱になるほどの膂力の持ち主だったのだが。

（しもひらお・なおし／関西大学学生）



「ホームレス」を手がかりに——

映像のなかの"生"

東條政利

ホームレスの人たちが登場する映画。しかも、主役あるいは脇役で登場する映画。このようなジャンルをつくったとしたら、どんな映画がこれに入ってくるだろう。映画の中に登場するホームレスの人々。

「ホームレス」を「家庭を持たない」という意味に考えれば、このジャンルの映画は意外に多いかもしれない。そう考えると、黒沢明の『七人の侍』の侍たちや、『用心棒』『椿三十郎』に出てくる三十郎と名乗る主人公もホームレスであろう。しかし彼等にとって、家がないというのは別にマイナスの印象を与えるものではない。日本の映画で、家を持てずに苦しい生活をしている人々を描いている作品なんて、ほとんどないかもしれない。大島渚の『太陽の墓場』は確かに釜を舞台にした映画であるが、あの映画の中心となるのは、やくざや労働者に寄生して生活している人々である。

◇

日本映画で、具体的にホームレスの人を描いているもので印象深いものとして、溝口健二の『西鶴一代女』が思い浮かぶ。この映画に出てくるお春役の田中絹代は、凄まじいくらいの女の一生を演じている。お春の人生は次の様なものである。

お春は貴族の生まれの女で、御所に仕えていた。彼女は自分より身分の低い勝之介に愛を打ち明けられ、彼に身を任してしまう。そこを役人に見つかり、不義密通でお春と両親は洛外追放、勝之介は斬首となる。しばらくして、跡継ぎを産ますために殿の注文にあう女を捜していた家来がお春に目を止め、彼女を城につれてゆく。

跡継ぎを産むと、お春は里に戻されてしまう。娘をあてに贅沢をしていたお春の父親は散財してしまい、彼女を島原の遊廓に送る。島原で花魁をしたお春は、借金を返した後、商人の奉公人として働くものの、花魁の過去がばれて実家に帰される。やがて、扇屋の弥吉がお春の前歴をも知った上で、是非とも嫁に欲しいと言ってくる。彼と夫婦になったお春は幸せなときを送る。だが、弥吉は強盗に殺されてしまう。失意のどん底の彼女は、尼になろうとする。

前に奉公人として働いていた店の番頭の文吉は、お春の居所を知ると、店の品物を持っていってお春にわたす。それに気付いた主人は、お春の所に品物を取りにいき、そこでお春を強姦する。その現場を尼に見つかり、彼女は寺を追い出される。文吉と駆け落ちするも、途中で文吉は捕まってしまう。

ときが流れ、お春は大分年をとり、路上の三味線弾きをする。けれども、それではお金もなかなか稼げず、非常に生活が苦しい。その彼女を助けた、忽嫁（そうか＝最下層の路上の売春婦）たちに勧められ、お春もまた忽嫁になる。

忽嫁をお春は続けていたが、ある日、お春の母が彼女を訪ねてくる。お春の産んだ子が殿になるので、彼女をその家が引き取るというのだ。しかし、お春は遊女売女に身を落としたということで、自分の子と一緒に住むことを許されなかった。ただ、一目だけ殿に拝顔を許される。我が子を見たお春は、殿の後を、その家来も振り切って、私の子ですと叫びながら追ってゆく。そして、その後彼女は尼となった——。

話が二転三転する映画なので、あらすじは長くなってしまったが、今ストーリーを振り返ってみると、お春がホームレスであったシーンというのは少ないかもしれない。しかし、そのシーンの生々しさは鮮明に頭に焼きついている。

溝口は映画の中で、多くの売春婦を描いている。「夜の女」では夫が戦死し、ある社長の愛人とな

り、捨てられ、売春婦となる女（田中絹代）。『雨月物語』では侍に強姦され、女郎屋で働くようになり、そこの客として入ってくる夫と出会う女（水戸光子）。『山椒太夫』では、だまされて自分の子供たちと引き離され、佐渡に売られて、そこで年老いていく女（田中絹代）。『赤線地帯』では吉原で働く女たち（若尾文子、京マチ子、木暮実千代、三益愛子、川上康子）。そして、『西鶴一代女』のお春。彼女たちの生は見る者の胸を締めつける。その中でも、一人の女の一生に焦点を当てて描いた『西鶴一代女』は、その主人公の女の生を、見る者に最も深く印象付ける映画であろう。

ところで、外国映画となるとブニュエルの『忘れられた人々』など、ホームレスを描いた優れた映画は多い。その中から最も新しい作品、ガス・ヴァン・サント監督の『マイ・プライベート・アイダホ』と、ぼくの最も好きな作品、ロベルト・ロッセリーニ監督の『奇蹟』の二作品を紹介し、それについて感想や意見を話したいと思う。

◇　◇

『マイ・プライベート・アイダホ』

監督／ガス・ヴァン・サント

主演／リバー・フェニックス（マイク）

キアヌ・リーブス（スコット）

主人公のマイクは、突然意識を失ってしまう病気にかかっている少年である。唯一の肉親は故郷のアイダホにいる兄だけ。マイクは父親を知らずに育ち、母親にも捨てられたのだ。そして今、彼はポートランドの安ホテルで生活している。そこには、ポートランドの市民社会のルールから溢れた人たちが住んでいる。みんな割と楽しそうに暮らしている。

そんな彼等の中にスコットもいる。スコットは、マイクとはかなり違った境遇の持ち主だ。父親はポートランドの市長で、家は裕福なブルジョア。彼はそこから飛び出して、マイクたちと一緒に住んでいるのだ。マイクとスコットは親友同士で、二人とも、自らの身体を売ることによって生活している男娼である。

ある日、マイクは母を捜しにいこうと決心する。友人のスコットも一緒だ。まず、彼等はマイクの兄のところに行く。その道中、マイクはスコットを愛していることを打ち明け、二人は結ばれる。兄のところで、母はあるホテルで働いていると聞き、二人はそちらへ向かう。しかしそこに母の姿はすでになく、イタリアに行ってしまったことを知らされる。彼等はイタリアにまで行くが、母が働いていた農場には母はおらず、ただカルメラという美少女が一人でそこにいた。スコットは彼女と恋に落ちる。マイクは一人でポートランドに戻る。

スコットもポートランドに戻ってきた。カルメラを連れて。が、ポートランドに戻っても、もうマイクのところへは行かない。スコットは父親が死んだのでその遺産を引き継ぎ、カルメラと結婚して、ブルジョアジーの人たちの仲間に入っていく。一方、マイクは、またもとのように男娼の生活を始める。マイクの住む安ホテルの親分格のボブは、仲間を引き連れてスコットのところに会いにいく。しかし、スコットは彼等を追い返す。

その後しばらくして、ボブが死ぬ。ボブの葬式。そのそばでは、スコットが父親の葬式をあげていた。マイクとスコットは、もはや全く違う世界に属していた。

◇　◇

マイクは根っからのストリート・キッドである。彼は、父親も知らず、母親に捨てられた少年である。兄のいる故郷のアイダホを離れ、ポートランドに移り住み、そこで男娼をしながら生活しているのだ。

一方、スコットは父親がポートランド市長で、ブルジョア生まれのブルジョア育ちという少年である。彼は、ただ家を飛び出しているだけで、ストリート・キッドも男娼も、いつでもやめることができる仮の姿に過ぎない。

この二人の関係が、この映画の軸となっている。

二人は友情の絆に結ばれているかのようにストーリーは展開していく。しかし、この絆は、スコットのイタリア娘との出会いによって脆くも崩れてしまう。スコットはホモよりもヘテロの愛を選んだのだ。おそらく、スコットにとってマイクは必要ではなかったのだろう。スコットの生活は将来、父の遺産を受け継ぐまでの仮の宿に過ぎなかったのだから。彼にとってのマイクも、仮の生活の一部を構成するものだったのだろう。一見同じように見える彼等の生活は、実は全く違ったものだったのだ。マイ

クはそれしか生活が考えられないのに対して、スコットはその生活が仮の宿に過ぎないものだからだ。その後、スコットは父の遺産を相続し、ブルジョアの仲間たちのところに帰っていく。そして、以前に一緒に暮らしていた仲間とは縁を切ってしまう。

この二人の関係はどうしようもない。全く希望がない。この二人だけではない。この映画は、苦しみと憂鬱に満ちている。マイクやスコット、それに同じホテルに住んでいる人々。彼等は全然明るくない。彼等の生活は暗い印象を与えるだけだ。彼等は全く生き生きしていないのだ。この映画では、ストリート・キッドの生活というのはほとんど感じられない。映画に出てきた彼等の生活というのは、あくまでも男娼としての生活であり、それ以外の生活的な部分はほとんど描かれていない。描かれているとすれば、最後のボブの葬式のシーンぐらいか。この映画でよかったシーンというのは、この葬式のシーンと、ボブとマイクの二人の身体を買う男が演ずるパントマイムぐらいだった。ただ、この映画は、ストーリーは面白いし、撮影のほうも凝っている。まあまあおもしろい映画といえるだろう。ただ、これを題材にしてホームレスの人について語るのは、かなり難しいのではないか。

ところで、この映画を気にいったある批評家は次のようにいっている。

「アメリカでは、七〇年代の後半に家族の崩壊が大きな社会問題となり、八〇年代は、失われた家族や家庭の再編成が社会的な課題だった。それを受けて、八〇年代後半のアメリカ映画には、家族の絆の確認や、心のふれあいを題材にしたものがあふれだしたのだが、その延長線上にあるのが、この『マイ・プライベート・アイダホ』なのだろうと思う。／主人公たちがゲイで、ホモセクシュアルの設定は、考えてみればショッキングであっても、ドラマにはなんのかげりも投げかけていないのは気持ちいい。」

実際、このような批評がこの映画には多かった。私はこの映画は、家族の問題をとらえている映画というよりは、異なる境遇の二人の若者の関係を描いたものだと思う。このような題材を描けば、作家が意識しなくても、現実に存在する階級の姿が浮き彫りになってしまうのだ。また、ゲイ、ホモセクシュアルの設定なのにかげりを投げかけていない、ということを評価しているが、なぜそのことを評価するのか理解できない。ゲイ、ホモセクシュアルの設定とは、必ずしもかげりを投げかけるような設定なのだろうか。

私は、この映画はかげりに満ちていると考えるが、それはマイクの生きている状況のかげりからである。彼は決して好んで男娼をしているのではないが、そうしている彼の状況、これはスコットのいる状況と全く断絶しているのだ。そして、今の社会では決してなくならない断絶なのだ。

◇　◇

『奇蹟』
監督／ロベルト・ロッセリーニ
主演／アンナ・マニャーニ
　　フェデリコ・フェリーニ

羊飼いをしている女（アンナ・マニャーニ）は宗教心が非常に強い女である。が、その宗教心は偏執的で独断的であり、思い込みもかなり強い。

ある日、彼女が羊飼いの仕事をしていると、放浪者風の若者（フェデリコ・フェリーニ）が通りかかる。彼はハンサムで、好青年風である。（フェリーニは若い頃、ハンサムで好青年風だったのだ。）彼女はこの若者を聖者であると思い込み、いろいろと話しかけるが、彼は訳が分からない様子である。その場を離れようとする若者に、彼女はなおも熱烈に話しかけ続ける。そうするうちに、いつの間にか彼女は眠り込んでしまう。

目を覚ますと、もう若者の姿はない。彼女は自分が奇跡を体験したと信じて興奮し、村に帰って、村人にそのことを熱心に話す。けれども誰も相手にしようとしない。それどころか、眠っている間に羊に逃げられ、羊飼いの仕事をくびになってしまう。

職を失った彼女は、野宿をして暮らす。お腹が空いて、彼女はミサの最中にリンゴを盗んだりするが、それは彼女の心の中では合理化されるらしく、罪悪ではないようだ。そのことで、ある意地悪な年老いた野宿者にからかわれたりする。

まもなく、彼女は自分が身ごもっていることに気づく。彼女には、まさに奇蹟と思えた。彼女にとって、身ごもった子は聖なる子であり、

奇蹟なのだ。しかし、そんなことは誰も信じないし、それどころか、どこの誰の子とも知らない子を身ごもったということで、彼女は大いにひんしゅくを買ってしまう。

彼女は、自分が野宿していた場所を年老いた野宿者に乗っ取られてしまう。彼女は抵抗するが、あきらめてそこを去る。去るとき、その野宿者は彼女に向けてブリキ缶を投げる。（ロッセリーニによると、ここがこの映画の決定的シーンであったらしい。）

彼女は、自分が以前住んでいた所に戻ろうとする。以前の隣人たちは彼女を見て、みんな歓迎の様子である。彼女は大喜びでその歓待に応える。しかし、その歓待は単なるお芝居だったのだ。突然、みんな、物を彼女に向かって投げ始め、彼女を嘲笑する。彼女はそこから逃れるしかなかった。もはや彼女には、村のどこにも居場所はないのだ。彼女は村を去り、山の中に入っていく。

彼女はどんどん山を上ってゆく。すると、山の上に教会が見える。彼女は希望に満ちてそこに行く。しかし、教会には入ることはできなかった。そして、そこで彼女は子どもを産んでしまう。彼女は叫ぶ。「ディオ、ディーオ、ディーオ……（神よ、神よ、神よ……）」

◇　◇

この作品は私が大好きな映画の一つだ。ロッセリーニは『無防備都市』『戦火のかなた』『ドイツ零年』といった戦争を扱った社会的なものが非常に評価されている。一般に、よく知られているのもこれらの作品であろう。しかしロッセリーニは、これらの作品以後も、少なくとも私が見たロッセリーニの作品で一番新しいもの、一九五八年の『インディア』まで、彼の対象を捕らえようとするスタイルをずっと変えずに映画を撮り続けている。ロッセリーニは相変わらずロッセリーニであり、素晴らしい作品を生み出し続けていたのだ。

私は、ロッセリーニの作品としては、もちろん『無防備都市』『戦火のかなた』も好きだし、それ以後の『ドイツ零年』『ストロンボリ　神の土地』『イタリア旅行』、そして『インディオ』も好きなのだが、『神の道化師、フランチェスコ』や、『アモーレ』のオムニバスの一篇でここに取り上げている『奇蹟』といった小作品的なものが、特に好きである。実際、これらの作品におけるような、人間と自然とが融合しているような状況、あるいは日常性を描くときに、ネオリアリスモはその美学的な技法を最大限に生かされるのではないかと思われる。

ロッセリーニの映画は、モンタージュによって現実あるいは実在を再現するのではなく、実在を記述する。このネオリアリスモの技法は、ヨーロッパの戦後期の破壊状況において、それを目の前にして、それを見ることしか為す術のなかったことから生まれたといわれるが、一方ではその状況がこの映画作家の美学的欲求に非常に適合していたともいえるだろう。彼はその美学的欲求を持ち続け、それによって彼の作品は、同じスタイルでずっと撮り続けられるのだ。

もちろん、彼の映画が社会的、歴史的、経済的状況によって考察されることは可能であるし、そういった必要性は大いにあるだろう。しかし、彼の映画、特に『神の道化師、フランチェスコ』や『奇蹟』を見るとき、その映画の見ごこちの良さや、その映画に出てくる生き生きとした登場人物、これはどこから来るのか、ということも大いに問題だろうと思う。

『奇蹟』において、野宿者となるアンナ・マニャーニ。彼女は、私たちに大きな感動を与えたジャン・ルノワール監督の『黄金の馬車』のときと同じように、この映画でも非常に素晴らしい演技を見せる。『奇蹟』の素晴らしさは彼女に多くを負っているだろう。そして、この作品の特徴的な面として、『奇蹟』は、アンナ・マニャーニが演じる主人公の生活をカメラが追って、記述している映画であるともいえよう。羊飼いをしている彼女、聖者に出会って興奮している彼女、野宿している彼女、そういったものをカメラで記述している映画なのである。

このカメラの視線は、私たちがふだん物を見ている視線に非常に近いものであろう。もちろん映画だから枠の中に風景があるが、モンタージュを駆使した映画のように私たちの日常的な視線からかけはなれたりは決してしない。ロッセリーニの、カメラの移動による撮影や、ワンシーン・ワンショットなどの映画的な技法は、カメラを私たちの視線により近付けた技法ではなかろうか。私たちの視線は移動し、連続している。しかも、そのことによって、それ以前のモンタージュによって実在を再現しようと

する映画と比べて、映像の迫力が失われたり、単調になったりなんてことは決してない。実際に、『無防備都市』において、恋人をナチスに連れ去られ、それを追う女（アンナ・マニャーニ）が銃で撃たれ倒れるシーンの迫力は素晴らしかった。これはグリフィスの『国民の創生』の、KKKが黒人から白人の娘を救い出そうとするシーンのカット・バックよりも、遥かに崇高な重みがあるだろう。（『国民の創生』は映画のストーリーの重要さを教えてくれる映画だ。なぜならば、この白人による黒人の差別を正当化するようなストーリーのために、決してこの映画を私は好きになれないから。）

『奇蹟』の野宿者は、まさしくその映画的手法のため、ドキュメンタリーの映画を見るように、現実に生きている者の姿として、私たちの目に写る。これは、『マイ・プライベート・アイダホ』のマイクを見る私たちの目や、エルマンノ・オルミの『聖なる酔っぱらいの伝説』の橋の下で暮らす主人公を私たちが見る目とは、決定的に異なる。これらの映画の登場人物からは、あくまでも物語の中での生活者という感じしか受けず、現実的な感じを全く受けないのだ。（これら二つの作品についても、映画としての面白さを否定しているわけではない。）

ロッセリーニは語る。

「私の各作品には、一方で説明的な描写があり、他方では事実がある。私の心を占めるのは、この事実に到達することである。」

おそらく、この事実に到達しようという意志が、彼の映画の技法を生み出し、それによって、人々の生が非常に現実的なものとして私たちに感じられるのであろう。

今年は、東京、大阪、京都と三回もロッセリーニの映画を見る機会に恵まれた。それ以前にも、ロッセリーニの映画を見たことがあったが、残念ながらそれはビデオによるものだった。『神の道化師　フランチェスコ』と『奇蹟』はこれが日本初公開である。まだ、ロッセリーニの作品は未公開のものが多いという。これから、それらの作品も公開されることを期待する。

（とうじょう・まさとし／大阪大学聴講生）

【INFORMATION】

ニュー・ヨークにおけるホームレス・ピープルの生活を描いた映画が、近く公開される。タイトルはそのまま『HOMELESS』。主役を演じるのは、あるテレビ番組のアンケートで〝世界で一番有名な日本人〟となったオノ・ヨーコである。

この文章の書き手が関西人なので、まだ詳しい情報が入ってこないのだが（東京では既に一度、試写が行われているはず）、薄汚れたコートを着て紙袋をぶら下げたまま歩くヨーコをカメラが追う形式のものらしく、やはりそこにはハーレムやブロンクスといった地区のイメージが与える先入観や偏見を排した、素裸の都市が映し出されているだろうことを期待する。

ヨーコ自身は、現在もニュー・ヨークの或る孤児院を定期的に訪れ、精神的物質的に援助を続けているそうである。とかくロック・スターの場合は、〇〇エイドといった類いの、毒にはなっても無害にさえならぬ式の低劣な「支援」を繰り返すものから、「死刑廃止フォーラム90」にメッセージを寄せたピーター・ゲイブリエルや、来日公演で「障害」児を優先的に招いたり、ゲイに圧倒的な理解を寄せるマドンナまで佃煮にするほど多くいるなかで、しかしテレビで見た、孤児院施設を訪問するヨーコの姿ほど、純粋な素朴な姿はなかったろう印象が焼き付いている。少なくともレノン死後の藁半紙を丸めたような仕事よりは感動的だった。そのような純粋な愛情に裏打ちされたテンションを、この映画が商業ベースと無縁なところで有していたらきっと素晴らしいだろうなと思う。ふと期待も大きくなってしまうわけである。

因みに併映は、ポール・マッカートニーのワールド・ツアー（昨年三月の日本公演も含む）を追った『GET BACK』。関西では公開未定。

〔この項／S〕

日本寄せ場学会 年報「寄せ場」 バックナンバー一覧

※第1号 88・3・31発行

◇創立大会研究報告「文学と寄せ場――そのかかわりについて」池田浩士／「『寄せ場』研究の諸問題」青木秀男／「西ヨーロッパにおける移民労働者の現存」加藤晴康

◇創立大会開会挨拶&発言「寄せ場学会の基本的視座について」松沢哲成／「山岡（やま）さんの思い出――フィルム編集にあたって」赤松和子

◇特集・流動する下層労働者「雇用変動時代のなかの寄せ場」下田平裕身／「国内出稼ぎ労働者と寄せ場労働者」八木正／「『浮浪者』行政対策の東西比較」本間啓一郎／「〈労働力〉商品化と福祉政策」小倉利丸／「山谷に労働者の自前の会館を」小田原紀雄

◇調査「山谷＝町内会住民の意識調査・中間報告」西沢晃彦／「釜ヶ崎＝労働者増加の実態とその構造」牛草英晴

◇合評座談会「『寄せ場』の内在的理解のために」

◇研究ノート「寄せ場の形成、機能、そして闘い」松沢哲成　ほか

※第2号 89・5・13発行

◇対談「寄せ場と〈労働〉概念の新たな視点」山崎カヲル&小倉利丸

◇転換期の寄せ場・現状「外国人出稼ぎ労働者の歴史と現状」田中宏／「寄せ場と外国人出稼ぎ労働者」渡辺英俊／「寄せ場差別の思想と実践」池田浩士／「裁かれた野宿労働者の反撃」和田研三／「山谷に労働者解放運動の拠点を」小田原紀雄

◇論文「『南方労働問題』と『大東亜共栄圏』論批判」松沢哲成／「〈問題〉としての日雇労働者とその意識」平川茂

◇国際比較「スクオッター研究をめぐる諸論点」青木秀男／「ラテンアメリカとバリオ」山崎カヲル／「ソウル・オリンピックとスラムクリアランス」柳在順／「アメリカのホームレス・ピープル」マイケル・ファブリカント&マイケル・ケリー

◇調査「労働者の釜ヶ崎への流入過程」牛草英晴／「88年夏・釜ヶ崎野宿者調査報告」本間啓一郎／「佐世保の〈アオカン〉をめぐる状況」斎藤嘉樹

◇フォト構成「山谷に佇む」長倉洋海　ほか

※第3号 90・5・19発行

◇第三回総会記念講演「天皇制と朝鮮人労働者」金賛汀

◇特集・寄せ場の医療問題「山谷における医療問題」藤井克彦／「笹島における医療問題」小柳仲顕／「〝やま〟と医療の周辺」山田真／「ある日雇労働者の生と死」池田浩士

◇報告「一九八九冬・寿からの報告」寿・木曜パトロールの会／「一九八九冬・釜ヶ崎からの報告」丹羽弘一／「『上映運動』をふりかえって」池内文平／「タイ女性ノイさんに冷たい判決」斉藤百合子／「寄せ場、そして天皇制」西日本支部

◇文献ノート「寄せ場に関する文献の研究」松沢哲成／「寄せ場文献100選」年報編集委

◇フォト「釜ヶ崎・朝」砂守勝巳　ほか

※第4号 91・5・25発行

◇特集・〈釜ヶ崎10月暴動〉＝西日本支部編「座談会・釜ヶ崎90年10月に何をみたのか／釜ヶ崎90年10月は何だったのか」／「概説・釜ヶ崎〈暴動〉90」／「釜ヶ崎〈暴動〉裁判レポート」／「資料・釜ヶ崎〈暴動〉に関する報道」

◇報告&小論「労働者の国内国際的『対流』と寄せ場」筆宝康之／「寄せ場のキリスト者たち――その歩みと課題」小柳伸顕／「『大和中央病院の差別殺人医療糾弾実行委』からの呼びかけ」里健一

◇論文「暴動の廃墟」柿上万蔵／「関係性の問題としての『野宿者』」丹羽弘一　ほか

運営委員会議報告

91・8・31裏築／山谷

八月三十一日、東京・山谷労働者福祉会館において寄せ場学会運営委員会が開かれました。以下、その報告をいたします。

（1）東西両支部の活動等の報告

西日本支部例会として開かれた「花岡事件」学習会（七月二十八日、神戸外大）に関して、および山谷、釜ヶ崎の夏祭りに関して、それぞれ報告が行なわれました。

（2）秋のシンポジウムの件

今年度より復活する秋季のシンポジウムは、来る十一月二十三日（土＝祭日）、広島で開かれることが決定されました。場所・時間の詳細は未定で、決まり次第お知らせします。

テーマは、地方都市における日雇労働・建設土木労働の現在と、それにともなう都市の変容、といった内容になるものと思われますが、正式なタイトルとともに今後煮詰めていくこととなりました。

（3）年報『寄せ場』第五号の件

年報は今年度より秋季に刊行されますが、その『寄せ場』第五号の内容（所載予定の論文など）が年報編集委員会から報告され、編集・制作への協力が要請されました。

（4）分科研究会の進行状況など

前回運営委ではプロジェクト・チームによる研究作業の推進が決定され、六つのテーマと呼びかけ人の名前が上がりましたが、そのひとりである斉藤博之さんより、「都市とその周辺」研究会の例会を秋からスタートさせていきたい旨が報告されました。

（5）財政会計

九一年度学会会計の中間状況が担当委員の高橋紀美子さんより報告されました（7ページに掲載）。

それによると、八月末日現在で早くも三十五万円の赤字。今後はさらに、東西の支部活動費や山谷会館献金（部屋使用）などで六十万円以上の支出が想定され、年報の販売を強化する必要があります。販売に関してお手伝いいただける方、事務局までご一報ください。

（6）『フォー・ビギナーズ寄せ場』の件

まだ原稿ができていません。責任者の松沢哲成さんを中心に、担当を割りふってやる方向で討議されました。

（7）新運営委員の件

去る五月の総会後、運営委員にはならない旨を申し出ていた田中雄二さんの件について討議し、その申し出を了承することとしました。

（8）来年度総会の件

九二年度の総会は名古屋で開催されることが確認されました。日程は、現地の関係等で今後変更の可能性もあるものの、とりあえず四月四日（土）、五日（日）の両日と設定されました。

♤　♤

※次回の運営委は、秋季シンポジウム翌日の十一月二十四日（日）、広島で行なわれます（場所、時間は未定）。

――事務局より――

▽この秋は、シンポジウムの開催と年報の発行という二つの事業が重なって、忙しい季節となっています。シンポジウムの開催は、まる二年ぶり。おとといの十月二十八日、大阪・部落解放センターで行なった「寄せ場の変容と歴史――釜ヶ崎に焦点を合わせて」以来となります。前回は、告知が不十分だったため参加者も三十人前後にとどまりましたが、内容はなかなか濃密で、そこでの報告と討論は、有形であれ無形であれ学会活動に意味を与え続けている、と信じます。今回のシンポも、広島、西日本、全国において、九二年以降の学会活動につながるような、豊かなものにしていきたいと思います。

▽ちなみに、八九年シンポの内容を所載したパンフレットも好評で、西日本支部などは、その売上げが一定、経済的な支えともなりました。しかし財政ということになると、やはり年報『寄せ場』を販売することがカギになります。さらにまた、学会活動の財政基盤を固めるためだけでなく、自らの活動の意味をより広く問い続けるためにも、年報を積極的に販売していくことは欠かせないことであると考えます。財政のお粗末な団体が存続した試しはなく、そして内輪だけで通じる話に充足している団体にもまた、未来があった試しはないのですから。

▽『寄せ場』第五号は、この十一月中旬に完成し配本され、同月二十三日のシンポジウム会場で販売される予定です。お楽しみに。

▽会費納入、まだの方はよろしくお願いします。